

第2回文化財保存活用地域計画フォーラム 古文書からみる三春—『三春の宝物』再発見！—抄録

日時：令和6年12月14日（土）10：00～12：00

場所：さくら湖自然観察ステーション

1. 開会

2. 歴史民俗資料館長あいさつ

本日はお忙しい中、第2回文化財保存活用地域計画フォーラムにお集まりいただきありがとうございます。

フォーラムに先立ちまして、町の文化財保護を担当している立場から皆様にお願ひがあります。近頃、町内や周辺市町村の寺や神社で盗難被害が相次いでいます。被害にあっているのは主に人がいないお堂や神社などで、一目がないことで犯罪が起こりやすくしているようです。今日のお話を聞いて文化財などに興味を持たれた方は、月1回でも年1回でも良いので時々近所のお寺や神社に行ってみてください。お金のかかる設備はなかなか整えられませんが、人が通うということが一番の防犯対策だと思いますので、散歩がてら近所を回っていただけますようお願いいたします。

本題に戻りまして、三春町では町内の文化財のどのように保存し、どんなふうに活用していくかといったことの方針を定める三春町文化財保存活用地域計画の策定を昨年度から開始し、令和8年度に文化庁の認定をもらえるように作業を進めています。その中で町民の皆様は文化財に興味を持っていたいて、それを未来に伝えていく意義を理解していただくために、町の文化財保護審議委員の方々に協力いただきまして、このようなフォーラムを開催しております。第1回目を9月21日に地域計画と三春の文化財全般をテーマにまほらで話し合いました。そして、2回目となる今回から、審議会の先生方の専門を活かしたお話をいただき、ご参加の皆さんの身の回りのことや昔の話や思い出あるいは人から聞いた話など様々な情報や、文化財をどのように保存活用していけばよいかといったアイデアをいただくような会としたいと思います。後半の意見交換でお話しいただいたり、お配りしましたアンケート用紙からご意見いただけますようお願いいたします。

3. 基調講演「古文書からみる三春」

講師：小松賢司氏（福島大学 人間発達文化学類教授）

4. 質疑・意見交換

問：本日は貴重な講演ありがとうございました。

古文書の紙はかなり昔からのものと思うが、今まで残っているということは日本の紙と他国の紙で違いがあるのか。

⇒小松教授）おっしゃるとおり、日本の紙は他国に比べて強い。逆に、明治以降の紙は強くない。

それは、海外から技術が伝わり化学薬品を用いるようになったからである。その紙は100年もたない。図書館などで古い本がボロボロになっているのを皆様も見たことがあるかもしれない

が、近代以降の紙はくしゃくしゃにすると粉になってしまう。江戸時代の紙は天然素材で作っているため何百年も残り続ける。ただし、天然素材で作られているためネズミや虫の被害を受けやすいのと、水に長時間つけると元にもどってくっついてしまう。きちんと湿度などを管理しておけば何百年も残り続ける。

問：三春は何度も大火に見舞われている。うちの中町だが、江戸中期の八幡町から出た火事は大町近辺まですべて燃えた。今、家にある蔵は明治34年のものだ。この文書は本当にうちのなのかと疑問を抱いてしまった。今回の古文書は大火をどのようにくぐり抜けたのか。

⇒平田館長）火事の際は、まず土蔵への避難が考えられる。また、大火の場合は、すぐに火が回ってくるわけではないので、川又さんだけではなく、町の人が総出で安全な場所へ避難させたと思われます。川又さんの家での通常の管理もしっかりしていたし、いざという時は周辺の町人たちの頑張りもあって、現代まで貴重な資料が残っているということだ。

⇒小松教授）江戸時代は文書主義の時代なので、文書がなくなるということは根拠がなくなる、裁判にも勝てなくなる、自分の主張が通らなくなる。江戸時代、文書は本当に大事なものであったので長持などに入れて保管していた。今でも貴重なものであるが、江戸時代の人々にとっても法的根拠になる本当に重要なものであった。

問：貴重なお話ありがとうございます。本日のお話大変面白く聞かせていただいた。三春には昔から猫騒動と言われるものがあるが、今回のお話はまさに「豆腐騒動」ともいえると思った。

古文書の村方文書のシステムというのはいつごろから日本に根付いたのか。

⇒小松教授）中世、戦国・室町時代あたりからがスタートである。ムラという集団が自分たちのことは自分たちでやるというのは室町戦国時代から。文書を残す、引き継がなければならないとか、法的根拠を残しておかなければならないとかになるのは、江戸時代が安定してきてからになる。支配者である殿様のカリスマだけで治めていたら文書等は不要で、個人的な信頼関係だけで事は済む。これが2代目3代目の殿様になってくると、官僚や役人など、個人的な信頼関係のない人たちとのやり取りになってくる。すると、客観的な証拠がないと説明ができないし、やりとりもできなくなってしまうので文書の担う部分が大きくなっていった。江戸時代の中頃になると文書の時代になってくる。今回取り上げた享保の文書は、全国的には少なく、これより後の時代の文書の方が多いのだが、三春の場合はこの時代の文書が多数残っているのが特徴だ。

問：文化財について、今と昔では藩域と行政区が異なる。町境の調査はどのようにするのか。

⇒小松教授）三春藩領を調べようとするなら、現在は隣町になってしまっている部分まで調査しなければならない。

⇒平田館長）行政の側から発言させていただくと、三春町は三春町の範囲でしか直接的に力を及ぼすことができない。このため、周辺市町村の区域に対しては協力をお願いするという形となる。今回、計画を策定する中で、関係する周辺市町村との協力は必要だと思う。今でも雪村庵の資料を預かるなど、協力させていただいている部分は少なくない。

問：地域計画において、現在の三春のみを考えていては駄目だと考えている。周りを巻き込んだ地域

連携の形でやらないと成り立たないのではないか。

⇒平田館長) 町の計画の中に他市町村の事をいれるのは難しいように考えるが、周辺市町村と協力をしながらというような文言は入れることはできるかもしれない。

問：最近はカーナビなどの技術の発展が目ざましい。そうすると、読み方の難しい地名などは失われてしまうのではないか。

⇒小松教授) 地名も皆様が宝だと考えていけば残っていくのではないか、地域計画でやっていくことでもあると思う。

問：(講演の中で触れられていた) 接待をした時の食の豊かさに非常に驚いた。貝とか魚とか、どうして三春に運ばれてきたのか非常に気になった。刺身まであって、どのようにもってきたのか。

⇒小松教授) 自分自身も文書を読んで大変驚いた。塩問屋や魚問屋があったところから三春にとって重要だったのだと思う。塩問屋はそれこそ川又さんだし、魚問屋は藩がかなり力を入れていた。魚は岩城や浪江方面から入ってきており、当初相馬が中心だった塩も、瀬戸内の上質な塩が流通するようになると岩城から来るようになった。

問：自分が中学生頃に学んだ土農工商の世界と比べ、今日聞いたお豆腐屋の話からすると、町人はかなり力をもっていたのか。

⇒小松教授) 自分も古文書を読んで感じた。しかし、ほかの地域からすると、三春は藩の力が強い。強いながらも今日の講演で触れたように、町人も静かな反発をしていたのだろう。享保という時期も、民間の力が強くなってきたタイミングでもあったのだろう。

5. 閉会

(平田館長) 本日は川又さんの資料を取り上げたが、同じように町や村の役人を勤めた家などには多くの資料が残っている可能性があります。それらを収集・整理し、どのように活用するかも計画の中に盛り込んでいきたいと考えています。古文書を整理し、目録を作って解読する作業は多大な手間がかかる。ご参加の皆様や周りの方で古文書が読める方の力を借りながら、現在は読めない方も、そこに参加して読めるようになって、多くの方が調査に加わっていただくなどできる体制ができれば良いと考えています。

本日はお忙しい中、大変ありがとうございました。小松教授もたくさんの資料をご準備いただきありがとうございました。